

やはり俺の瀨霊廷生活
は間違っている

小野こまっち

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

やはり俺の青春ラブコメはまちがっているとBLEACHのクロスオーバーです。時系列としては、BLEACH原作74巻の後になります。

オリジナルな展開が多い作品となっていますのでご注意ください。

目次

1.	ワーカーホリック	1
2.	久しぶりの	4
3.	一番隊直属特別対応班	7
4.	会議とラーメン	10
5.	初動捜査	14
6.	ミーティング	17

1、ワーカーホリック

偽物、模造品、贋作、パチモン。世の中には偽物が掃いて捨てるほど出回ってる。それも本物と見分けがつかないようなよく出来たやつが。だけどそれはあくまで偽物。比べれば両者には越えられない壁があることを忘れちゃいけない。

これは俺、比企谷八幡が最近遭遇した偽物の話。どうして俺たちは往々にして本物を求めるんだろうな……

「あー忙しい忙しい忙しい！乱菊さんの原稿まだか？」

「まだですー！」

今日も我が九番隊は、編集作業に追われていた。ってかなんで締切って守れないんだらうね？ある人は余裕ですよ！ガハハと笑いながら、またある人は締切？何それ美味しいの？と言いながら締切を踏み倒していった。お陰で連日徹夜である。九番隊マジブラック。

「すまん比企谷！ちよつと乱菊さんの所行つて原稿貰つて来てくれ！」

「マジっすか……。俺もちよつと締切がアレで……。」

「お前のコラムならきつちり締切守つて出しただろ。スマンがよろしく！」

「ええ……。俺あの人苦手なんだよなあ……。」

俺が所属している護廷十三隊九番隊は、瀧靈廷の守護の他に機関誌『瀧靈廷通信』を編集、発行を担当している。俺はその第七席として日夜、今みたいに編集作業と守護任務追われている訳だが、更に色々あつて瀧靈廷通信にコラムを連載しているので仕事にがつちり拘束されている。

・・・・新しい縛道じゃないか？この仕事とかいうやつ。

ちなみにそこで忙しいbotと化したイケメンが俺の上司、檜佐木副隊長である。多分副隊長業務もあるから俺以上に仕事で拘束されたさしずめ社畜副隊長である。

そんな社畜七席の俺の元に新しい仕事が舞い込んだのは、乱菊さんの原稿を間に合わせて編集が一段落ついた頃だった。

「悪い比企谷、ちよつといいか？」

つべー副隊長からの呼び出しだよ。自分より上の立場の人の呼び出しはろくな事がない、ソースは俺。しかし訓練された社畜なので上司からの呼び出しには考えるより先に体が従つてしまう。悲しいね。

副隊長は大事な話だからと普段編集会議で使う部屋に場所を移し、話始めた。

「今度一番隊直属で新しい部署ができることになってな。なんでも各隊から隊員を少数集めて様々な事態に対応する部署だそうさ。まあ要するに何でも屋だな。」

「はあ……。んでその部署がどうしたんすか？まさか……。」

「ああ。そのまさかだ。お前にはその部署で仕事をしてもらう。」

やはり上司からの呼び出しはろくな事がない。

「それってお断りすることは……。」

「スマンが上司命令だ。」

「マジかよ……。まあ命令なんでやりますけど……。話の感じだと俺は一番隊に異動ってことでいいんですか？」

「いや、その部署は常設ではないらしくてな。依頼があると呼び出されてその解決にあたるんだそうさ。だから所属は変わらないぞ。まあ詳しくはこの顔合わせの時にでも聞いてくれ。」

そう言つて副隊長は日時と場所が書かれたメモを渡した。

やはり労働なんてするもんじゃねえ……。

2. 久しぶりの

後日、俺はその新しい部署の顔合わせ会場である一番隊の隊舎にやってきた。一番隊は配属されるだけで名誉、隊士は全員エリートというヒラ隊士の俺には全く縁のない隊だ。

門にいた隊員に要件を言うと部屋に案内された。

「ヒッキー!!久しぶり!なんでいるの?」

「あらあなたも呼ばれたのね。」

「由比ヶ浜、雪ノ下も・・・、」

部屋に入るやいなや声をかけてきたのは雪ノ下雪乃と由比ヶ浜結衣だった。2人も真央霊術院からの同い年で腐れ縁だが、まさかここまで関係が続くと本当は縁が腐っているのか疑わしい所だ。

「はっちまーん!!我もいるぞ!」

「あつ八幡に由比ヶ浜さんに雪ノ下さんも呼ばれたんだ!」

「とっ戸塚!戸塚も呼ばれたのか!」

「ちよいちよい八幡!我は?我もいるよ?ねえ!」

「感動の再開の所悪いけど早く中入ってくれる？詰まってるんだけど。」
「あつはい。ごめんなさい。」

この天使は戸塚彩加、その隣のは材木座義輝。そして最後に入ってきたのが川・・・、川・・・川なんとかさん。この3人も霊術院からの同期だ。

「彩ちゃんにサキサキに中二も！なんか同窓会みたい！」

「そうね。入隊してからはあまり会ってなかったものね。」

俺達が久しぶりの再会に驚いてるとまたも懐かしい人が入ってきた。

「よし、全員揃ったな。席についてくれ。会を始める。」

「・・・・・・・・！！平塚先生！！」

平塚先生は真央霊術院で俺達の担任だった先生だ。最近一番隊に入ったと風の噂で聞いたがマジだったんだなあ。

「久しぶりだな。ほらさっさと席につけ比企谷。」

久しぶりの感覚を懐かしく思いながら席に着くと、それを見て平塚先生は話し始めた。

「こうやって話をしてると霊術院時代を思い出すな！今回新しく設置される一番隊直属特別対応班の責任者、一番隊、平塚静だ。私含め見知った仲ではあるが、自己紹介を雪ノ下から頼む。」

「分かりました。五番隊第四席、雪ノ下雪乃です。よろしくお願いします。」

「次はあたしだね。四番隊第五席、由比ヶ浜結衣です！よろしく〜」

「次は僕だね。三番隊第五席、戸塚彩加です。よろしくお願いします。」

「けぷこんけぷこん！十二番隊所属、第六席の材木座義輝である！皆よろしく頼む！」

「九番隊第七席、比企谷八幡だ。よろしく頼む。」

「十三番隊第五席、川崎沙希。よろしく。」

あれれ〜同期なはずなのに俺が一番下っぱだぞ〜。もしかして私の評価低すぎ!?!

それにしても驚いた。原稿取りに行く時たまに会ったり少し話をするがコイツらが今何席だとか仕事の話はしなかつたからなんていうか新鮮だな。

3. 一番隊直属特別対応班

「さて、まずはこの特別対応班が出来た理由だが、君達は最近行われている改革は知っているかね？」

「はい。総隊長主導の貴族層を含めた瀨靈廷の改革ですね？」

「そうだ。簡単に行つてしまえばこれはその一角なわけだ。複雑化している近年の瀨靈廷内の事件に対して部隊の枠を超えて対処出来るかつ少人数で迅速に対応出来る組織を作ろうというお考えだそうだ。」

なるほどねえ。確かに檜佐木副隊長の言つた何でも屋つてのは言い得て妙だな。

「聞いてはいると思うがこの特別対応班は常設ではない。上から依頼があつた際に私が呼び出して任務にあたつてもらふ。そして依頼が完了したら通常の任務に戻つてもらふ。ここまでは質問あるか？」

「ちよつといいつすか？」

「なんだ比企谷？」

「この班の人選つてどうやって決めたんですか？いくらなんでもこんなに顔見知りばかり揃うつてのはどうも出来すぎてると思うんですけど……。」

「ああ。今回人事権は私にあったからな。総隊長からは三席未満の席官で実力の問題がない隊士を5、6人という条件で好きにやっていいと言われたので相性などを考えて選ばせて貰った。まあ私の臍負も多少あるがな。他にはあるか？」

「はい。予想される任務の内容はどのようなものがあるのでしょうか。」

「いい質問だ雪ノ下。総隊長曰く表立って護廷十三隊を動かせないが専門的な能力が要求される任務を任せたいだそうだ。他には質問あるか？・・・無いようなら本日は解散だ。」

ええ・・・。なんていうか業務内容ぎつくりしすぎてない？コピペしまくった報告書でももう少し内容あるよ？

同じような事を思ったのか雪ノ下も頭を抱えていた。しかし、これ以降質問は出なかった。で解散となった。

数日後、いつも通り隊舎で仕事をしていると材木座が持ち込みにやってきた。漣靈廷通信で小説といえ「双魚のお断り！」なんか看板だったが作者の元十三番隊浮竹隊長はお亡くなりになったために編集部としては次の看板小説が欲しいところではある。

「ただど材木座の書いたラノベはなあ・・・。なんかどつかで見たことある設定と内容で、ハッキリ言って面白くねえんだよなあ。」

当然の事ながら持ち込みの時点でボツにして連載会議には回していない。

「ムホンムホン！八幡よどうだ今回の出来は！今現世で流行りの異世界転生物にしてみただが……。」

「いやお前これ流行りつてより流行つてたつて感じだろ。今回もボツだな。」

「そんなあ、何とかしてよはちえもーん」

「俺が仮にジャ○プの有能編集者だったとしても無理だ。んじや俺は仕事に戻るから。」

「まあ待て八幡よ。少し話でもしないか、あの特別対応班についてな。」

「なんだ？質問なら平塚先生にすればいいだろ。まあ色々相談したい気持ちは分かるが……。」

「そうであろう。早速なんだが……ん？地獄蝶か。」

俺と材木座の腕にそれぞれ地獄蝶が止まる。どうやら噂をすればなんとやら、特別対応班の呼び出しらしい。前回の部屋に集合せよとの事だ。

「……八幡よ。」

「ああ。行きますか。」

俺達は一番隊隊舎に向かった。

4. 会議とラーメン

俺と材木座が前回の部屋に入ると雪ノ下達は既に集合していた。

「遅いぞ比企谷、材木座。さっさと席につけ。」

平塚先生の言葉に従い、席に着く俺と材木座。

それを見て先生は話し始めた。

「我々特別対応班初の任務だ。諸君は最近起きた流魂街西一地区で起きた障害事件を知っているかね？」

「確か今朝まで三番隊の隊士が調査に行っていた事件ですよ。ここ一週間で3人が何者かによって襲われ怪我をしたっていう……。相楽さんと三谷さんに何かあったんですか？」

戸塚の言葉に平塚先生は淡々と答えていく。

「ああ。今しがたその調査にあたっていた一般隊士2名が襲われ重体との報告があった。」

「……!!そんな……。」

戸塚の顔から血の気が引いていくのが分かった。

「君達の任務は、引き続きこの事件の調査及び実行犯の特定、または逮捕だ。今回の犯行は以前までと異なり白昼堂々の犯行だから目撃者もいるだろう。雪ノ下、由比ヶ浜、川崎は周辺の聞き込み。比企谷、戸塚、材木座は現場で実行犯に繋がるであろう証拠を探してくれ。20時には定期報告のミーティングを行う。何か質問はあるか？」

「今回負傷した隊士に話を聞くことはできるのでしようか？」

雪ノ下の質問はもつともだ。何かしら特徴なりを聞き出すにはやられたやつに聞けばいい。

「残念ながら今は不可能だ。話ができるようになり次第、四番隊から連絡がくるようになっていく。」

「分かりました。」

「他に質問はないな。各自明日より任務に当たってくれ。以上だ。」

それぞれぼちぼちと部屋を後にする中俺、材木座、戸塚はしばらく部屋に残っていた。特に戸塚は部下が負傷したのだ。ある程度こんな仕事しているとよくあることとはいえ、くるものがある気持ちもわかる。

3人の間に重苦しい空気が漂う中、材木座が口を開いた。

「なあ、八幡。明日何時から現場いく？」

「そうだな、なんかしら報告はあげなきゃならんからなあ……。10時くらいから始め

る感じでいいんじゃない？戸塚はどうよ？」

「それでいいと思うよ……。本音をいうと今からでも調査をしたいところではあるけどね……。」

「そうか……。材木座は？」

「特に異論はないぞ。」

「んじや9時半くらいに白道門集合で。」

何となく重苦しい空気は変わらないまま、俺達は一番隊隊舎を後にした。

そんな時でも腹は減るもので、一番隊隊舎から近いラーメン屋に寄ってから帰ることにした。

その道中……。

「おい！比企谷！」

「……平塚先生！どうしたんですか？」

「いや、帰りにラーメン屋にでも行こうとしていたら、ちょうど姿が見えたからな。どうだ？一緒に？」

「いいつすよ。ちやうど俺もラーメン屋行くとこだったんで」

「そうかそうか！なら私の行きつけの店に行こう！この近くなんだ。」

ラーメン屋とはなにか……。人と人が交わる交差点なのかもしれない……。byは

5. 初動捜査

平塚先生に連れられてきたこの店は、現世にある「天下一品」にインスパイアを受けた元死神が経営する店で、瀨霊廷内にいくつも支店があるのだそうだ。ちなみに九番隊隊舎の近くにはない。

「なんとというかこのドロツドロのスープがいいっすね、よく麺に絡む。」

「そうだろう？この店は本店だから他の支店とは一味違う。」

俺と先生は麺を一心不乱にする。するといつしか話は平塚先生の復帰の話になった。

「どうして急に現場復帰なんてしたんすか？」

「まあ私も雇われの身だからな。上からの命令は断れん。人手不足のご時世だ。私みたく実力がある若手は現場に出ろってことさ。なんてったって若手だからな！」

やけに若手を強調する先生。ウンソウダネセンセイハワカテワカテ。

「まあ、復帰そうそう新設部署のトップをやらされるとは思わなかったよ。」

そう言いながらスープを飲む先生。

「大丈夫なんすかね俺達で、新設ならある程度注目は集めるでしょ。結果出さなきゃ不

味いことも多いと思うんですけど。」

新設部署に復帰したばかりの平塚先生が責任者、さらに構成するのは若手席官ばかり、色々なところが目を付けてくる要素しかない。

「まあな。だがこれでも私なりにベストなメンバーを集めたつもりだよ。雪ノ下は君達の同期なら一番の出世頭だ。現世での戦闘経験も豊富だし、副隊長候補筆頭だそう。由比ヶ浜だつて今や上級救護班班長だ。他の連中も実績はしつかりとある。」

知らなかった。出世にはあまり縁がない俺はその辺の事情に疎いところがある。あれ？なんで俺は選ばれたのん？

「なんで俺は選ばれたんすかねえ？あんま実績は出してないんすけど・・・。」

「まあ目に見える実績はな。しかしそれだけで選んだ訳では無い。相性も見て決めたと言つたら？きつと君が必要になると思つて私は君を選んだのだよ。」

「・・・先生。」

そのおかげで仕事が増えたんですよ、とは言えなかった。

「比企谷、今回は一般隊士とはいえ、死神が負傷した。気を引き締めてかかってくれ。」

「了解つす。」

この日はこれでお開きとなった。

次の日予定通り俺達は隊士が襲われた現場に来ていた。

地面には斬撃の跡のようなものが残されていて、材木座はそれに携帯型霊圧測定器とやらでなんかしてした。

俺と戸塚は周辺に何かないか探している。

「八幡ー！なんだろうコレ？」

戸塚が何か見つけたらしい

「なんだこれは？」

小型のガラス瓶というべきなのか、現世にあるカプセルを大きくした感じの容器だった。

斬撃跡を調べた材木座に聞いても分からないという。

「むほんむほん。とりあえずこれはミーティングで報告後、十二番隊で詳しく調べよう。」

「頼んだ。まあそろそろ暗くなるし一旦戻るか。」

「そうだね！」

こうして一日目の調査は終わった。

6. ミーティング

「さて全員揃ったな。定期ミーティングを始めよう。」

平塚先生の発言から定期ミーティングがスタートする。どうやら書記は雪ノ下が務めるらしい。

「目撃者の方はどうだった？」

「はい。第一発見者の老人は現場に駆けつけた時に不審な人物達が逃走するのを目撃しています。少なくとも死覇装を着ていなかったので死神ではないと思われます。」

川崎の報告を聞いた材木座が小声で耳打ちしてきた。

「おかしいぞ八幡。あの斬撃跡からは霊圧を感知した。少なくとも死神ではあるはずなんだが……。」

お前それは自分の報告の時に言おうよ……。

「他にはないか？」

「はいはい！現場近くの民家の人達が死神が使う鬼道みたいな光をみたってー！」

「そうか、次は現場の方だが……。」

「け。ぷ。こんけ。ぷ。こん！現場にあった斬撃跡から微かに霊圧が感知された。さらに近くの

草むらからこのような物が見つかった。我の方で解析をしている。以上―」

「なるほどな。しかしこれは……。」

「本来死神が使える鬼道系の証拠があるにも関わらず、死神の目撃がないとなると……。」
「とにかく明日は聞き込みの人数を増やそう。雪ノ下、由比ヶ浜は引き続き聞き込みを、比企谷は川崎と聞き込みに戻ってくれ。材木座、戸塚は引き続き現場の調査、これ以上なにか出るとは思えないが一応頼んだ。」

平塚先生の指示を終えて、この日のミーティングはお開きとなった。

「なあ八幡よ、お主は今回の事件どう思う?」

材木座が会議後に話しかけてくる。

今上がつている証言だけで推理するなら死神が死覇装ではない服で魂魄や隊士を襲った事になる訳だが……。

「さあな? 案外鬼道覚えた魂魄が犯人とかなんじゃねえの?」

「いやいや、それはないだろう。」

なんだろう、コイツにマジレスされるとなんかムカつくんだが……。

「それよりあの変な器の解析はいつ終わるんだ?」

「まあ2、3日は欲しいな。何せ何が入る物かすら検討もつかん。最悪隊長の力を借り

ねばならんかもしれんな。」

「そうか……。」

「ちよつといい比企谷、明日の事なんだけど……。」

川口さんから急に話しかけられる。そうか、俺と川西さんは明日組むから色々確認したいよな、すっかり忘れてた。ありがてえな川井さん。

「ああ、明日の時間とかか？別に俺は何時でもいいぞ。」

「そう、今日は何時くらいだった？」

「10時くらいだな。」

「そう、ならそれくらいで。集合は白道門前でいいね？」

「ああ。」

それだけ言うと川崎は帰っていった。

「我いまだに距離あるんだよなあ川崎氏……。」

「わかる。」

まあ誰かにデレるタイプのやつじゃないしな。まあデレても距離が埋まるとは思わないけど。